プロにならないという選択
――アマチュア楽団参加者の語りから――

早稲田大学　髙橋かおり

本報告では、アマチュア楽団（オーケストラ・吹奏楽・アンサンブル）参加者の語りから、音楽（芸術）で「プロフェッショナルを目指さない」という選択に働く要素や要因を明らかにすることを通じて、音楽を仕事ではなく趣味にすることの位置づけを考察する。職業選択における社会学的研究ではプロフェッショナルになる過程やその選択経緯に目が向けられがちであり、プロフェッショナルになることを諦めることは「挫折」の経験としてとらえられがちである。しかし本報告ではその「挫折」の経験を肯定的に捉えなおすことで、趣味として音楽を継続することの意味付けを分析する。これらの作業を通じて、仕事と趣味の境界を探る試みを行う。

具体的には､2015 年 10 月～2016 年３月にかけて実施した首都圏のアマチュア楽団で活躍する 14 名への半構造化インタビューを分析素材として用いる。調査対象者のほとんどはフルタイムで仕事を持ちながら終業後や休日に練習、本番にとりくんでいる。

「音楽で食っていける」人は一握りだということは、音楽家を目指す指南書でも、一般的言説においても言われている。そして音楽の場合は明確に「やりたいこと（久木元 2003）」があったとしても、産業構造的に若者は「夢追い型フリーター」を経由せざるを得ない。しかし近年では、音楽大学所属者に対して、プロフェッショナルの演奏家を目指すのではなく、一般企業への就職を支援する動きが広まりつつある（例えば大内 2015）。大内は、音楽に熱心に取り組んだこと、厳しいレッスンを受けてきたことは、一般企業への就職においても有利に働くと論じる。つまり、音楽に熱心に取り組むということは、その技術力を磨くというだけではなく、社会性を身に付けるための訓練としても作用しているというのだ。

本報告の対象者は、音楽大学に所属経験があるものはおらず、音楽を仕事とするか否かという選択の多くは大学進学以前に行われている。そこで、高等教育に入る前の「諦め」の経験について見ていく。その際に、①音楽業界のどのような現実を見てプロになることを諦めたのか、②音楽業界に対して自身をどのように位置づけたのか、という２点にまずは着目する。そのうえで、その後のキャリアから③音楽経験がその後の就業経験においていかに有益に働いているのか、を示す。

結論としては、①については音楽業界で「食っていく」ことの厳しさの認識がまず挙げられる。そのうえで、②については、その厳しい社会の中で生き抜いていくことが難しいという自己定義をすることによって自信を納得させ「諦め」させている現実がある。特に注目すべきことは、このような「諦め」の経験では既に音楽業界で活躍している「プロ」（例えばレッスンの先生など）の言葉が大きく影響しているということが挙げられる。

そして、③については、職場で集団行動や目標に向かって計画を練ること、あるいは仕事の後進指導などにおいて、楽団での経験は大いに役に立っている。また、趣味として音楽を楽しむためには、時には職場の理解も必要であり、職場から分断される経験ではない。他方「音楽で食っていかない」、つまり「やりたいこと」を諦め、趣味として音楽を選ぶという選択には、音楽を嫌いになりたくないという論理も働いているのである。つまり、好きだからこそ適切な距離感をもって――純粋なアマチュアとして――取り組むことで、音楽とのかかわりを継続させようとするのである。

参考文献

久木元真吾，2003「『やりたいこと』という論理――フリ―ターの語りとその意図せざる帰結」『ソシオロジ』84(2):73-89.

大内孝夫，2015,『「音大卒」は武器になる』ヤマハミュージックメディア.